

中瀬 ゆかり

『新潮45』編集長

1964年 ●和歌山県田辺市生まれ
1987年 ●新潮社入社、書籍編集部配属
1998年 ●『新潮45』編集部異動
2001年 ●同誌編集長に就任



飽くなき好奇心で タブーに挑む!

恐れを知らぬ発想力

三十七歳の若さで編集長に抜擢されるやいなや、「やるなら、それしかない」と、月刊総合誌『新

潮45』を「おじさん向け雑誌」から働く女性をターゲットにした「人間探求マガジン」に大転換。女性作家の風俗嫌体験レポートなど斬新な企画を次々に打ち出す。

そのタブーを恐れぬ発想と行動は、中瀬の故郷・和歌山県田辺市で後半生を過ごした南方熊楠を連想させるところも…。

かつてはビビリだった

「和歌山は海に向かって開いているためか、常に外に出たい、違う文化や土地を知ってみたいと思っていた」という中瀬も「かつてはビビリ(臆病)だった」とか。「東京は地震が怖いし…」と、隣の奈良県に進学。「両親が喜ぶ」と教員免許も取った。しかし、元来父親譲りの読書好き。マスコミ志望が募った。「東京に行くお金がなかった(笑)」ので、関西で採用試験があった新潮社に入社を決めたという。

熊楠の研究者・父喜陽も、東京行きを後押しし

た。「娘に熊楠を見たわけではないでしょうけど、本物に触れるとどどん吸収すると思ったんでしょっね」。

事件は文学を凌駕する

熊楠の才能が大英博物館で開花したように、新潮社で中瀬の知的好奇心がはじけた。

「遠藤周作から電話が入り、安部公房が会社に来たり、夢のような毎日」。一流作家の担当編集者も務め、「作家は本物の知識人。自分の辞書にはないものを見せてもらい、最高に勉強できた」と振り返る。

「事件にはバンドラの箱のように人間の業が詰まっている。それをとことん掘り起こすことで、文学を凌駕することもあり得るのではないかと、事件中心のノンフィクション路線をブレずに追求。良質の文体で事件の裏側を伝えるスタイルを確立した。

「女性の視点で見た性」も積極的に取り上げ、「割程度だった女性読者は六割に増えた。

故郷は精神のお守り

酒好き・競輪などギャンブル好き。スポーツ紙に「破天荒なキャラクター」と紹介されるその才

能は、テレビ・ラジオなどからも引張りだ。

ヘッドハンティングも受けたが「新潮社あつての中瀬。自由にやらせてくれるこの新潮社を愛している」と熱く語る。

「ダメになったら和歌山は温かく迎えてくれるという安心感がある。それが精神的なお守り」と語る中瀬は、二日もあけず両親に電話するという。その中瀬は紀州人を「のんびりして欲がない、ガツガツしない」と分析。しかし、外で刺激を受けると「凶々しいくらい発想力」を発揮するのも紀州人のDNA。熊楠やこの中瀬のように…。(敬称略)



Yukari Nakase

天衣無縫・在野の巨人

南方熊楠 (1867-1941)

和歌山市生まれ。大学予備門(現東京大学)を退学した後、アメリカ遊学・放浪を経て渡英。大英博物館を拠点に、科学雑誌「ネイチャー」などへ民俗学など多様な分野の論文を投稿、世界から注目された。34歳で帰国、36歳からは紀州・田辺に永住し、粘菌研究の傍ら、柳田國男らと交流した。明治政府の神社合祀令に反対し、「エコロジー」という言葉をわが国で初めて使った自然保護の先駆者としても知られている。

